

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12176

研究課題名（和文）情動概念の存在論的可能性：現代フランス哲学研究への寄与

研究課題名（英文）Ontological possibility of the notion of affect: contribution to the study of contemporary French philosophy

研究代表者

柿並 良佑 (Kakinami, Ryosuke)

山形大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：40706602

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では現代フランス哲学研究から出発して、主として英語圏で生じた「情動論的転回（Affective Turn）」を承け、今日の人文科学・社会科学の諸分野で「情動」概念の領域横断的研究を行った。文学・メディア論・政治思想等々の分野にまたがるシンポジウムならびに継続的な研究会を組織し、各領域での最新の知見を共有することにより、領域横断的な議論の土台を整備することを目指した。その成果は論集の形で出版することが決定しており、研究者のみならず関心を持つ読者層に向けて広く公開される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は人文・社会科学の諸分野で、ときに散発的に、ときに部分的に連動してなされてきた情動研究に哲学的基盤を与えることを目指したものであった。その結果は上に言及した論集の、とりわけ「理論編」において提示されている。ヨーロッパ思想史に継起した情動ないし感情をめぐる思想を辿る作業と同時に、今日の状況が要請する新たな「情動」研究への視点を確保することは、例えばインターネット上を通して我々の行動を鼓舞し、幻惑する微細な社会的要素の分析へと、学術的営為を開くことにつながる。

研究成果の概要（英文）：Starting from the study of contemporary French philosophy, we have conducted interdisciplinary research on the concept of "affect" in the humanities and social sciences, based on the so-called "Affective Turn" that has emerged mainly in the Anglo-Saxon academic sphere. We have organized symposiums and ongoing study groups in the fields of literature, media studies, and political thought, etc., to share the latest findings in each field and to establish a foundation for interdisciplinary discussions. The results will be published in the form of a book, which will be made widely available not only to researchers but also to interested readers.

研究分野：現代フランス哲学

キーワード：現代哲学 情動・感情 アフェクト

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は現代フランス哲学、とくにジャン＝リュック・ナンシーの哲学の研究を起点として着手された。ナンシーの初期の仕事の中でも精神分析をめぐる論考では、主体の発生に先立つ「情動」の存在論的ステータスが示唆されていた。哲学の他者としての精神分析と哲学が交差する地点で、「情動」は結節点の役割を果たしているものと考えられた。同時代、例えばドゥルーズ&ガタリについて言えば、情動が『千のプラトー』などで重要な役割を果たした概念であることはよく知られている。とりわけガタリは集団実践の理論を模索する中で、主体が個体化したり社会化したりする条件を明確化する際、「集団」の問題を「情動の論理」に引き寄せて理解することを提案していた。ここでも情動は集団性・共同性の理解に欠かせない概念となっている。

さらにそのドゥルーズ&ガタリの思考を重要な参照軸として、2000年以降に英語圏で進行した「情動論的転回」という研究動向は無視しがたい。本研究は同「転回」を哲学的に再検討する試みである。

2. 研究の目的

本研究の目的は「情動」概念の哲学的射程を明らかにすることである。上記の「情動論的転回」は社会学やカルチュラル・スタディーズなどの諸分野で進行した、情動概念に焦点を合わせた研究動向であるが、例えばその主な成果をまとめた論集(*The Affective Turn*, 2007)には狭義の哲学研究者の論考は収録されていなかった。伝統的な概念対である 理性と感情 ないし 精神と身体 という枠組みに収まらず、むしろ身体能力と微視的次元で結びついた「情動」の機能が多分野で検討されていることは注目すべき事実である。だが、そうした成果を踏まえて、哲学研究の場面でこの概念を新たに見直すことが本研究の課題である。

3. 研究の方法

本研究は主として以下の3点を柱として進められる予定であった。(1) 情動概念の哲学史的探索、(2) 情動概念の同時代的布置、(3) 情動の存在論の可能性。

この内、(1)については哲学史上の基本的な文献の読解を軸として、情動(affect)概念の登場する背景や、同概念と類似概念との差異について着目しながら作業を進めた。(2)について、当初は精神分析・政治・哲学の3分野を中心にして、同時代の思想史的連関ならびに影響関係を走査する予定であった。実際には次項目で述べるようにシンポジウムならびに研究会を共同で組織・運営することとなり、多分野と連動してより広い展望を開くことになった。(3)については、研究計画全体の総括として情動の存在論を一定程度まとめることを企図したものである。

方法として研究会以外には伝統的な文献収集・読解が中心であり、各年度には海外(フランス・パリ)の図書館での調査を予定していた。

4. 研究成果

研究成果として、まずは一連のシンポジウム・研究会について概略を述べる。2020年の表象文化論学会(オンライン研究フォーラム)ワークショップ「情動」論の現在 その多元的前線」を組織し、司会を務めた。同ワークショップは文学・メディア論・ゲーム研究・フェミニズムの各分野における情動をめぐる最新の知見を探り、議論の地平を模索する試みとなった。質疑応答も活発で、ここからさらに領域を拡大した研究会を立ち上げる契機であったとすることができる。先のワークショップの登壇者である難波阿丹氏と共同で主催された「情動」論研究会(いずれもオンライン)の記録を、成果の一部として以下にまとめておく(回により遠藤不比人氏、難波氏の科研費による共催となったことを付記する)。

* 非公開研究会1(「接触と情動の社会記号論」)

2020年11月29日

講演: 野澤俊介(北海道大学)

第1回 「ポストフォーディズムと男性性 感情管理、コミュカ、クリップ」

2020年12月13日

講演: 河野真太郎(専修大学)

司会: 遠藤不比人(成蹊大学)

* 非公開研究会2(「乳児と情動」)

2021年1月28日
講演：深津さよこ（聖徳大学）

第2回 “The Subject of Affect: Bodies, Process, Becoming”
2021年2月20日
講演：リサ・ブラックマン（ロンドン大学）
司会：飯田麻結（ロンドン大学）

第3回 「音楽美学と感情の哲学」
2021年3月20日
講演：源河亨（九州大学）
司会：難波阿丹（聖徳大学）

第4回 「脳 身体の循環の中で創発する情動 生物学的心理学からのアプローチ」
2021年5月15日
講演：木村健太（産業技術総合研究所）
司会：柿並良佑（山形大学）

* 非公開研究会3（難波阿丹：映像情動論について）
2021年8月5日

* 非公開研究会4（柿並良佑：フランスにおける「情動論的転回」の逆輸入について）
2021年9月2日

第5回 「ゲームプレイを駆動する感情/情動 覚醒と恐怖の視点から」
2021年10月23日
講演1：木村知宏（東京大学）「デジタルゲームが生起させる感情経験 面白さの基底にある覚醒経験」
講演2：向江駿佑（立命館大学）「デザインされる情動 ホラーゲームにおける身体と恐怖」
司会：難波阿丹（「情動」論研究会、聖徳大学）

第6回 「色彩と味覚：五感の情動論」
2021年11月20日
講演1：日高杏子（芝浦工業大学）「『色を分ける 色で分ける』（京都大学学術出版会）」
講演2：久野愛（東京大学）「『視覚化する味覚 食を彩る資本主義』（岩波書店）」
司会：難波阿丹（聖徳大学）

第7回 「情動の政治と2010年代のポピュラー・メディアにおける日本刀イメージ」
日付：2022年2月19日
講演：渡部宏樹（筑波大学）
司会：柿並良佑（山形大学）

* 非公開研究会5（遠藤不比人：フロイトと情動について）
2022年5月29日

以上の題目からも窺われるとおり、多分野にまたがって情動・感情（affect, emotion, feeling）の諸相が洗い出され、用語・概念間の齟齬をも孕みつつ、これまで分析の目が届かなかった対象が浮かび上がってきたと言える。機縁となったシンポジウムの際にも、非公開での研究会においても指摘したことが、ドゥルーズ&ガタリを震源とする「情動論的転回」は英米圏で、さらに「逆輸入」を経たフランス語圏においても「社会科学」上の思想運動という観を呈したことは否定できず、本研究がこれに対する「人文科学」からの応答という意義を有することは、ここで再度銘記しておきたい。とはいえこれにとどまらず、社会科学などの隣接分野、さらには時に遠く、時に対立しもするかに見える自然科学の知見との接点が探索されたことは本研究計画開始時には予想しえぬ成果であった。パンデミック状況のために当初予定した最終年度の海外調査は断念せざるをえず、さらにその後2度にわたって研究実施期間を延長することとなったが、反面、オンライン研究会という方法の一般化により、上記のような学術的交流が可能になったことは是としたい。最後に、本研究のより詳しい成果は遠からず刊行される論集によって広く公開される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Ryosuke Kakinami	4. 巻 -
2. 論文標題 Rien que rien -- en guise d' hommage a Jean-Luc Nancy	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Philosophy World Democracy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柿並良佑	4. 巻 1172
2. 論文標題 身振りの追憶 Transir, transition	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 86-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柿並良佑	4. 巻 2
2. 論文標題 人間（オム）なきオマージューパタイコとナンシー、思考の身振りと力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多様体	6. 最初と最後の頁 103-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柿並良佑	4. 巻 21
2. 論文標題 観念に到来せ（ざ）る病について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 物語研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柿並良佑	4. 巻 9
2. 論文標題 キリスト教の非/脱構築 アンリとナンシー、否認された出会い	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 49-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20678/henrykenkyu.9.0_49	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柿並良佑	4. 巻 27
2. 論文標題 断片の共同体 イェーナから われわれ へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 シェリング年報	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計7件(うち招待講演 3件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 柿並良佑
2. 発表標題 Dans la Cite, les hommes ne s'embrassent pas ; 「都市にて人間は抱擁せず」
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ryosuke Kakinami
2. 発表標題 Re-commencement, reprise de la pensee
3. 学会等名 Colloque Jean-Luc Nancy : Anastasis de la pensee (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柿並良佑
2. 発表標題 情動(の政治)について考えるとどのようなことか?
3. 学会等名 第36回新潟哲学思想セミナー(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryosuke Kakinami
2. 発表標題 Figures de singularites (apres la deconstruction) -- etre, amour et politique chez Jean-Luc Nancy
3. 学会等名 Derrida Today, 6th Conference, Concordia University(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柿並良佑
2. 発表標題 「キリスト教の非/脱構築 アンリとナンシー、否認された出会い」
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会、第十回研究大会、シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柿並良佑
2. 発表標題 「断片の共同体 イェーナから われわれへ」
3. 学会等名 日本シェリング協会、第27回大会、クロス討論(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ryosuke Kakinami
2. 発表標題 L'acte de foi et/ou une foi en acte
3. 学会等名 "Thinking With Jean-Luc Nancy", Oxford International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

表象文化論学会オンライン研究フォーラム2020 ワークショップ2「情動」論の現在 その多元的前線」
<https://www.repre.org/conventions/2020/workshop2/index.php>
 ワークショップ2「情動」論の現在 その多元的前線」報告：渡部宏樹
<https://www.repre.org/repre/vol40/1/ws2/>
 国際シンポジウム Thinking With Jean-Luc Nancy
<http://www.comp.tmu.ac.jp/decon/cn6/pg1150.html>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------